

園番号 705

令和5年度 奈良市立青和こども園 研究実践概要

園長名 小林尚子
全園児数 128名

1. 研究主題

心が動き主体的に遊ぶ子どもを目指して
～チームで見取る子どもの育ちや学び～

2. 研究年度 初年度

3. 研究主題設定理由

「やってみたい」「こうしたい」と心を動かし、主体的に遊ぶ子どもを育てるためには、職員一人一人が子ども理解を深め、意図をもって環境構成や援助を行なっていくことが大切であると考えます。そのためには職員間で子どもを多面的に捉える方法を探り、環境構成や援助に繋げ、保育の充実を図っていききたい。

4. 具体的な研究内容

①研究のねらい

遊びや活動に取り組む子どもの姿を職員間で共有し、環境構成や援助の在り方を振り返り、心を動かし主体的に遊ぶ子どもの姿に繋げる。

②研究の重点

- ・日々の遊びの中で子どもが「人・もの・こと」と関わる姿から心が動く場面を捉え、子どもの興味や学びについて探る。
- ・子ども理解を深めるための記録のとり方、子どもを見る視点や振り返り方を探り、職員間で多面的に子どもを見取る。
- ・職員間の対話を大切にし、子どもの見取りや育ちの共有を通して、環境や援助を見直し、保育の改善に努める。

③ 活動の方法

1、「でいあシート」を活用して

「でいあシート」を用いて職員研修を定期的に行う。保育者の意図や思い、遊びや子どもの様子について気付いたことを出し合う中で、子どもの育ちや学びを見取り、援助や環境構成等を協議する。

【事例1】 5歳児5月 「足で動かしてるやん」

「自動で動いて乗れる車をつくりたい」と、A児、B児、C児が試行錯誤して遊んでいる。倉庫から様々な長さや太さの筒・旗立台を見つけ、坂道で実際に転がしたり筒を組み合わせた中、長い筒に旗立台の棒を差し込むと転がることに気付いた。自分達のイメージした通りに転がったことが嬉しくて「ここに乗ったらいいんちゃう？」と3人で筒の上に乗ってみると、「動いた!」「やったあ!」と喜んだが、「これ、勝手に動いてないやん」



「足で動かしてるやん」と気付き、顔を見合わせて大笑いしていた。そして「乗れるように、上に段ボールをつけよう」と考えを出し合いながら、再び、イメージに合う車をつくり始めた。

担任の思いや見取り	職員間で出た見取り・気付いたこと
◎自動で走る車づくりという同じ目的に向かって、いろいろ試しながら遊んでほしい。 ◎動く車を完成した達成感を味わってほしい。 →車のイメージが共有できるように、どんな車なのかを具体的に聞いたり、一緒に倉庫に探しに行ったりした。	◎写真の子ども達の表情から、楽しさや満足感が伝わってくる。 ◎みんなで一緒に何度も試行錯誤をした結果なので、うまくいかなくても思いきり笑い合えたのではないかな。

◆話し合いから分かったこと

子ども達の「自動で動いて乗れる車をつくりたい」というイメージを実現させてあげたい保育者の思いが強く、そのために必要と考えたイメージや思いを共有できるような援助に偏っていた。しかし、子ども達は結果ではなく、友達と一緒に作る過程の中で満足感や達成感を味わっていたことが分かった。

<反省・評価>

でいあシートの写真の表情に視点をあてて職員間で話し合ったことで、保育者の思いと子ども達の姿に違いがあることが分かった。保育者は結果までを見通した活動にこだわらず、遊びの仲間となりその時々で子ども達が感じていることをくみ取り寄り添えるようにしていくことが大切であると感じた。

【事例2】 3歳児11月 「わあ、パリパリって音がする」

D児が大きなカゴの中のたくさんの落ち葉を数枚掴み、自分の耳元に近づけて握ると音がることに気付き保育者に知らせた。「パリパリっていい音がするね」と保育者が言うと、D児は得意気に喜んだ。その様子を近くで見ていたE児に「なんだかいい音がするんだって」と保育者が声をかけると、D児はE児の耳元で落ち葉を握ってみせた。E児も真似をして自分の耳元で落ち葉を握ると「わあ〜！」と笑い、音が少しくすぐったい様子で肩をすくめた。D児とE児は顔を見合わせて笑い、繰り返し、お互いの耳元で落ち葉を握って、音を聞かせ合うことを楽しむ姿が見られた。

担任の思いや見取り	職員間で出た見取り・気付いたこと
◎気付いたことを保育者に伝えるのと同じように、友達にも伝え、友達と関わるきっかけになってほしい。 →保育者とD児のやり取りを見て興味をもっている様子だったE児に声をかけ、D児と	◎保育者が良いタイミングで声かけをした後、側でD児、E児がやり取りしている様子を見守ったりしていたことで、自分たちで音を聞かせ合い、一緒に楽しむ姿に繋がったのではないかな。
E児が関わるきっかけづくりをした。 ◎D児とE児が感じた面白さを共有し合っほしい。 →D児とE児がお互いに関わり合っ楽しむ様子を見て、二人のやり取りを側で見守った。	◎保育者が「パリパリっていい音だね」と言わなければD児は葉っぱの音をどう表現したのだろうか。 ◎保育者が、あえて2人の様子を見守った事で、互いに音を聞かせ合っ楽しむことができたのではないかな。

◆話し合いから分かったこと

- ・今まで保育者は、子ども同士をつなごうという思いから積極的に声かけをしていたが、話し合いの中で、子どもの様子に合わせて見守る姿勢をとっていることが明らかとなり保育者の子どもへの関わり方の変化に気付くことができた。
- ・D児との関わりの中で葉っぱの音について「パリパリするね」と保育者が言ったが、「いい音がするね」「音が鳴ってるね」などの共感方法であればD児が葉っぱの音を自分なりに表現したかもしれないと推察した。

<反省・評価>

- ・子ども同士が進んで関わりをもてた理由について話し合ったことで、保育者は、子どもの姿や発達段階に合わせて声かけや見守り、声をかける際の言葉の選び方を意識していくことが大切であると感じた。
- ・多数の職員で話し合ったことで、保育者が意識していなかった自身の姿を明らかにすることができた。このことを積み重ね保育に活かすことが、さらに意識や意図をもった援助につながると思う。



2、学年会議を通して

保育後、学年会議で遊びや子どもの様子、担任の思い等を話し合い、翌日の子どもの育ちや経験につながる環境構成や援助を保育に反映できるようにする。

【事例3】 4歳児11月

	ばら組	ひまわり組
子どもの姿	園庭や保育室でおうちごっこを楽しんでいる。イメージを膨らませて遊べるように“みにはうす”の近くにテントを出したり、段ボールで壁をつくったりして遊んでいた。	保育室でラーメン屋さんをして遊ぶことを楽しみ、園庭でもお店屋さんをしようと、保育室から看板等を持ってきて“みにはうす”で始めた。
子どもの思い	自分のお家みたいにテレビやベッドなどをつくって置きたい。	ケーキやクッキーのお店がしたい。

学年会議 「同じ場所で違う遊びをしていることについて」

	ばら組	ひまわり組
担任の思い	友達と一緒に家のお家のイメージを膨らませ、実際に使って遊べる大きさの物をつくることで、友達とのやりとりを楽しんでほしい。	<ul style="list-style-type: none"> ・お店屋さんをしたいという子どもの思いを実現させたい。 ・秋の自然物も取り入れながらケーキやクッキーづくりを十分に楽しんでほしい。
環境構成	<ul style="list-style-type: none"> ・“みにはうす”の横に家に見立てたテントを立てる。 ・つくった家具やごちそうを置くことができる広いスペースを確保する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ケーキやクッキーに見立てて遊べるよう、段ボールやカラーボード、自然物等を準備する。 ・材料に砂が混ざるのを防ぐため、砂場近くの“みにはうす”から離れた場に机や材料を用意する。

翌日の子どもの遊びの様子

ばら組	ひまわり組
手づくりのテレビやソファ等の家具を置いたり、友達と家のイメージを膨らませながらお家ごっこを楽しんだ。	友達と一緒に用意した材料を使って、イメージを膨らませながらケーキやクッキーをつくり、並べて楽しんだ。

◆話し合いから分かったこと

担任同士が子ども達の遊びの様子だけでなく、両クラスの子どもの何を楽しんでいるのかや遊びの見通しについて話し合ったことで、互いに、広い場と見立てて遊べる材料用具、落ち着いて遊べる空間が必要であり、それぞれの遊びにあった場の設定を行うことがよいのではないかと考えた。

(反省・評価)

- ・その日にあったことをすぐに学年間で話し合い、子どもたちが何を楽しんでいるのかやそれぞれのクラスの様子と発達に必要な経験は何かを考え、環境構成や援助の工夫を行ったことで、子どもが積極的に遊ぶ姿につながった。
- ・毎日互いのクラスの様子について話し合い積み重ね、職員同士話しやすい関係が構築できていたことで、子どもにとってより良い環境について考えることができた。

5. 研究の成果

- ・でいあシートを用いて、写真を見たり保育者の意図を聞いたりしながら研修を行うことで、遊びの様子や子どもの姿を共有しやすく、保育者だけでは気付かなかった子どもの思いや学び、保育者の意図の再確認ができ、多面的な見取りにつながった。その積み重ねから、保育者の考えやかわり方が変化してきたことで、友達との関わりが広がったり進んでやりたいことをする姿が見られるようになったりと、子どもの姿に変化がみられるようになった。
- ・職員間での会話を大切にしてきたことで、相談しやすい雰囲気ができ連携を図りやすくなった。一人で悩んでいることも、声を掛け合い気軽に話せる仲間がいることで、新しい気付きや学び、客観的な視点、新しいアイデアを得ることができ、同僚性が高まった。



6. 今後の課題

- ・職員間で保育者の思いや子どもの見取り等を話し合ったことを活かし、次の日の環境構成や援助の工夫につなげることを積み重ねることが主体的な子どもの姿につながると考える。その後の遊びや子どもの姿についての話し合いをするなど、継続した研修方法の工夫も必要であると考える。
- ・学年間での話し合いはできるが、園全体での話し合いの機会は頻繁に確保することが難しい。保育の充実が図れるよう、話し合いの時間や頻度、方法などを検討する必要性を感じている。